

【特別報告】

「峠を越えて」 一 全体学習・輝ける日々 一

徳島県同教・板野町立板野中学校

森口 健司

私は5年前板野中学校に赴任してきました。赴任した年、部落差別の現実に苦しむ生徒の姿を目の当たりにし、その現実を乗り越えていくために、当時の仲間とそれぞれのクラスでの部落問題学習を公開し合い、学年全体で部落問題学習に取り組んできました。その形態については、報告集3頁をごらんください。

この取り組みを全体学習と呼ぶようになったのですが、その全体学習を通して変わってきた教師や生徒、私自身を語りながら、私なりにつかんできた同和教育に寄せる願いや思いを報告させていただきます。

当初、私たちの意識の中に、中学生にもなれば自分の気持ちを発言すること、ましてや本心を語ることはないという意識がありました。しかし、この全体学習という取り組みによって、生徒の本当の思いは語られていくようになっていきました。

全体学習に取り組むまでの授業は、私たち教師自身がその本心を生徒たちに語り切っていました。だから、生徒たちも本当の思いをクラスの仲間に語ることがなかったのだと思います。

生徒たちは空気を吸うがごとく差別を吸収しその中で苦しみ揺れています。しかし、同和教育の中身は、そんな現実を乗り越えていくものにはなっていませんでした。

それは差別意識を植えつけられてきた私たち教師が、同和教育への研究も研修も不十分なまま教壇に立ち、自分の表面的な価値観を押しつけてきた授業であり、自らの差別意識をごまかし「差別はいけません」と言い聞かせや、お説教をしてきた授業であったからだと思います。

またその授業の大半は、部落差別の現実が示された資料を読んで、感想を言わせるだけの授業であり、決まり切ったことしか語れない状況の中で、しらけきった生徒たちに感想を書かせて終わっていました。

そこには自らの内面にある差別意識をごまかして、教師に評価される内容をひたすら書き続けた生徒の姿がありました。

そんな取り組みが本音と建て前をうまく使い分け、部落に生まれたことを悲しくつらいこととしかとらえられず、部落の人たちに対する同情心のみをかりたててきたように思います。そしてその中で息をひそめ、顔さえあげることができない部落の生徒たちは、無気力にさせられていきました。

板野中学校では、このような授業の現実を「密室の同和教育」と分析しました。全体学習はこのような現実を乗り越えるための実践であったように思います。

1991年度の徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業で、M夫が参観の先生方に、訴えるように語った言葉は、そんな同和教育のあり方を問いかけていく発言として心に残っています。その発言は次のようなものでした。

《ぼくは中学に入学して自分が部落に生まれたと知ったとき、ものすごいショックが心の中に沸き起こってきました。

それはそれまでに部落のことを教えていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは、差別されて惨めなものとしか授業で教えてもらってなかつたからだと思うんです。今考えてみると、部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわな

かつたからそうなったと思うんです。

でも今は、マイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを、全体学習やクラスでの部落問題学習で教えてもらっているように思います。

ぼくたちが続けてきたような本心を語り合う学習を昔から続けていたら、部落差別というものはもっと小さいものになっていたと思います。》

私たちはお互いの授業を公開し合うことによって、生徒の心を揺さぶり切れていた現実を乗り越え、切磋琢磨しながら本物の授業を目指していました。そこにはごまかしがない。本気で生徒と向き合う教師の姿が生まれていきます。この全体学習という取り組みは、部落問題学習が私たち教師にとって「教える」ことではなく、教師自身が本音を語り、自己の差別意識を洗っていくという自分自身の問題であることを自覚させてきました。

また全体学習の取り組みは、学級という枠を超え、同じ学年の生徒一人一人を部落解放に向けて生きるかけがえのない仲間としてつないでいきます。そして、教師にとっても生徒にとっても、自分のクラスの高まりだけでなく他のクラスの高まりがこの上ない喜びとなっていました。人間には自分さえよければという意識があります。それが自分のクラスさえよければという意識となって、学年全体の高まりには至っていませんでした。

しかし、全体学習はその意識を超えて、教師と生徒、生徒一人一人をつないでいき、教師集団もかけがえのない仲間となり信頼関係が培われています。そのことによって教師自らが、生徒一人一人にその生き立ちや部落との出会い、差別とのかかわりを語っていく状況を生んでいました。

私たち教師集団は、私たちの生き方、生きざまを生徒たちにさらしながら、生徒と共に自らの差別意識と闘い続けてきました。その中で私たちの思いは日々熱いものになってきました。

特に公開授業の後、学年全体で実施している全体授業では、授業者以外の教師も、生徒の思いにつなげてその本心を語っていました。その全体授業の中で差別とのかかわりを語った教師の発言を紹介します。

《私の弟は耳が聞こえません。補聴器をかけたらやっと聞こえます。今までそんな状況で頑張っている弟とどうかかわってきたのかと自分の中で考えたら、ずっとそのことを人に知られるのが嫌でした。私には弟と妹がいるんですけど、妹のことは何のこだわりもなく言えるのに弟のことはなかなか言えません。自分の実の弟のことがみんなの前でしゃべれません。そんな自分でいた。

それがこの学習をしていく中で、板野中学校の全体学習に取り組んでいく中で、部落問題を真剣に考える自分ができました。その学習の中で私は、やっと自分の弟に対する気持ちというのがはっきりとわかつきました。

自分の中にある弟、極端な言い方をするけど、家族の中だったら気軽に話ができるのに、いざ外で家から出て弟のことが話に出ると、自分の弟でないような自分には全く関係ないような素振りをしてしまう。そんな自分がすごく恥ずかしいと思えてきた。本当に情けないと思うようになった。実の弟のことさえそんな目で見る自分がものすごく恥ずかしくなってきたんです。

私の部落問題学習というのは、自分と弟とのかかわりだと思うし、私はそんな自分を変えていくために、自分自身のために部落問題学習をしていきたいと思います。》

私自身もこの取り組みの中で、今まで越えることのなかった峠を越えてきました。それは私の父親のことでした。私の父親は私が小学校に入学した頃から建設現場で働いていました。

当時、私は父親が「土方」をしていることを恥ずかしいことのように思っていました。小学校の4年や5年のときのことを思い出します。父親と母親が、学年初めに提出する、家庭環境調査にある家族の職業欄に、どう書こうかと相談していた姿を今もはっきり覚えています。

ある年は農業と書いてくれました。家族が食べるだけの米をつくっていたからでした。ある年は運転手と書いてくれました。同じ現場で働く人たちをマイクロバスに乗せて現場に行く。そのことで日給以外に僅かな手当をもらっていたからそう書いてくれたのだと思います。

どれもこれも嘘だという意識が私の心の中にありました。でもそう書いてくれることによって私は安心して学校へ行けました。ごまかしていること嘘を書いていることに対する後ろめたさはありました。私は父親が好きだったのに、将来父親のようになりたくない。そんな思いでしか父親を見ていませんでした。

中学2年のときに、私は友人の言葉から初めて自分が部落出身であることを認識したときも「ああ、やっぱりそうか」と思いました。しかし、クラスの半数が部落の仲間であった中学時代は、部落問題はさほど自分にとって深刻なものではありませんでした。

それが高校へ進学しクラスでたった一人になったとき、部落は私に重くのしかかってきました。当時、高校で行われた部落問題のロングホームルーム、これほど嫌なものはありませんでした。なんでこんな無意味な、私の神経を逆なでするようなことをするのかとしか思えませんでした。

年に1回、なんの前触れもなく見せられた同和教育の啓発映画、それも本当に嫌なものでした。他のクラスにいた同じ部落から通っている友人が、部落の人間であることを隠そうとして、映画の核心にせまった場面で強がるように笑っていました。その姿を見て私は部落の仲間の苦しみを肌で感じました。

そんな高校時代をすごした私は、とにかく故郷を離れることを第一に考えて大学を決定しました。それは部落差別から逃げることを意味していました。私は京都で大学生活を過ごすようになります。のびのびとしたしたい放題の学生生活でした。本当にたくさんの友人ができました。今も京都の地は私にとって大切な場所であり京都へ行くたび、私が暮らした下宿の方へすぐに足が向きます。

それほど私にとって大切な場所であるのに、私はそこで暮らした4年間、自分が部落出身であることをずっと隠し続けてきました。京都で出会った人のほとんどが私を部落の人間とは知りません。でも部落差別が厳然と存在します。部落差別の現実を目の当たりにしていく中で、私はたまらない思いで息をのみ自分で殺してきました。

尊敬する人、信頼する人から出る差別の言葉というのはつらいものがあります。アルバイト先で私を大切にしてくれたおばさんがいました。こんな人と知り合えて本当によかったですと思っていたその人が、ある日私の目の前にさっと4本指を出しました。そして「森口さん、あの人はこれでよ」と言いました。

私は頭の中でその4本指のことは知っていました。しかし、そのことを目の当たりにしたのは初めてでした。震えてきました。必死に平静を装った。なんとも感じないような素振りをしましたが、顔はこわばり言葉をまったく失いました。

その夜下宿へ帰り、故郷で生命を削ってまで働き、私を大学まで行かせてくれた父や母のことと思いました。祖父や祖母のことを思いました。こういう差別の中を生きてきたのか、こういうように言われてきたのかと思いました。本当にたまらない思いでした。私が私でなくなっていく。このままでは本当にだめになっていく。そんな思いに包まれていました。

私は大学の2年から4年まで下鴨というところで下宿をしました。そこでも本当にすばらしい人と巡り会いました。それはその下宿で私たち下宿生の世話をしてくれたおばさんでした。おばさんは洗濯までしてくれました。田舎へ帰るといったら必ず土産まで持たせてくれました。

私の故郷、徳島の両親のことを気遣い、祖父や祖母のことを気遣い、そして「お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんによろしく」と言われました。

その下宿に父も母も祖父も祖母も誰もきたことがないのに、私がただ「父と母と祖父と祖母が田舎にいます」と言つただけなのに、いつも徳島の家族を気遣ってくれたおばさん。心の底から信頼し尊敬し本当に好きだったおばさん。そのおばさんがあるときそっと言いました。

「森口さん、あの人たちは生まれが違いますからね。かかわらないでね。」

それは部落の青年を指して言われた言葉でした。私は何も言葉を返せず黙ってうなずいていました。

そのとき私は、母のようにずっと心の底から尊敬しているおばさんですら、本当の気持ちを偽り京都を離れていくのかと思いました。そして、こんなすばらしい人の中にも、部落差別が入り込んでいるということを痛烈に思い知らされました。

私は部落差別の現実を目の当たりにしたこと、京都で部落差別に何度もぶつかったことが、故郷への思いを熱いものにしていきました。そして、自分を部落差別から解放し、私のこの思いを多くの仲間に語っていくためにも、故郷で教師になろうという思いになっていきました。

大学2年、3年、4年とお世話なった下宿を引き払うとき、父親が初めて下宿にやってきました。そして、親戚から借りてきた1トントラックで荷物を運んでくれました。

下宿には後輩が2人いました。後輩たちの父親や母親は、年に2度、3度、その下宿を訪れていましたが、下宿を引き払うときに初めて下宿へきた私の父親の姿は、後輩たちの父親の姿とはまったく違っていました。

厳しい差別の中で働き続けてくれた父親があつたから、大学を無事卒業することができた。そんな感謝の気持ちでいっぱいなのに、そのときの私は「初めて下宿へくるのだから、ネクタイの一つでも締めてきてくれたら……。」そんな思いでしか父親を見ることができませんでした。

父親はその1トントラックの後ろに苗木を3本積んでいました。1本はスダチの苗木であり2本はキンカンの苗木でした。私はそれを見たときに「なんちゅうかっこ悪いもん、もってくるんな」と思って、「父ちゃん、これなにするん」と言いました。父親は「お前が世話なったお礼に、植えさせてもらおうと思うてなあ」と答えました。自分の体を動かすことを通して、感謝の心を表そうとする本当に父らしい行為でした。

私は本当はうれしいのに、「父ちゃん、ありがとう」と言いたいのに、その言葉が出てきませんでした。「こんな礼の仕方しか浮かばんのか、もっと気のきいた礼の仕方があるだろう。」そう思う自分がありました。

父親は一生懸命、その苗木をおばさんの住んでいる庭先に土にまみれて植えていきました。私はこの父親の行為にずっと感謝の気持ちを持ちながらも、父親のその心をどうしても素直に受け入れることができませんでした。

かつて私は妻にすら父親の仕事を明らかにしませんでした。2人で結婚の約束をしてしばらくした頃だったと思います。妻は「お父さんはどんな仕事をしているの？」と聞きました。そのとき私は答えませんでした。私は怒ったように「一生懸命働っきよる」と言いました。答えになつていません。しかし、それは私の精一杯の言葉でした。妻はそれ以上何も聞きませんでした。

私の中にあった差別意識が、被差別部落に圧倒的に多かった父親の仕事を恥ずかしがらせていました。しかし、この部落問題学習への取り組みによって、私の父親に対する思いは変わっていきます。

私は今も、結婚したとき子どもができたとき、また子どもの成長を確かめるように人生の節目節目にその下宿を訪れます。その度におばさんが言ってくれる言葉があります。

「森口さん、お父さんが植えてくれたキンカンは実がしっかりついています。でも、スダチはなかなか花が咲きませんね。あの木を見るたびに森口さんがおいでた頃を思い出すんですよ。」

おばさんがしみじみと語ってくれるスダチの苗木とキンカンの苗木。父親があの苗木を植えてもう13年が経過します。

私はそのことを今、心の底から感謝できるようになり、「父ちゃんありがとう」と言える自分になれたことが部落問題学習に取り組んできた大きな喜びです。

私はこの思いを1992年度の同和教育の実践記録としてまとめた『よろこび』2号の一番最初に「スダチの苗木とキンカンの苗木」としてまとめました。

かつてだれにも語らなかったことを恥ずかしいとさえ思ったことを誇らしいものとして私は書きました。この『よろこび』2号が仕上がったときに、私は父親にその冊子を見せました。

数日後「父ちゃんあの本読んでくれた?」と言ったら父親は顔を真っ赤にしました。そして、父親はつぶやくように言ってくれました。

「お前のような先生がおったら、お前のクラスの部落の子はうれしかろうな……。」

その言葉がたまらなくありがたかったです。

それ以後、私は毎年出会う生徒たちにわが生い立ちを堂々と語ってきました。そんな私の生きざまが生徒たちの生き方を揺さぶっています。昨年度全国で封切られ、昨日の夜テレビでも放送しておりました、山田洋次監督の「学校」という映画を全校で鑑賞したとき、生徒たちの訴えによって翌日、クラス全体で映画のテーマについて話し合いがもたれました。

その授業の冒頭、田中邦衛という役者が演じていた猪田幸男、イノさんに寄せて語った生徒の発言は、クラス全体を大きく揺さぶり、その授業をより感動的なものにしていきました。それは次のような発言です。

《字を書けない人が一生懸命字を覚えていたところがあつたけど、あの人の姿とぼくの父ちゃんがダブってくるんです。ぼくの父さんもあんな感じだったんかなあと思えてたまりませんでした。

小学校のとき、宿題を教えてもらおうとしたことがよくあったけど、あのときの父さんは苦しかつただろうなあとと思うんです。今ではつきりと覚えているのが、算数の宿題を教えてもらって、その次の日、学校にその宿題を持っていって答え合わせをしたんです。そうしたら全部間違っていた……。ぼくはそのとき父さん、あかんなと思ったんです。

でも、昨日あの映画を見て父さんのことと思ったら涙が出そうになった。わからないのに一生懸命にぼくのことを思って教えてくれた気持ちがものすごくわかるんです。ぼくはほんまに一生懸命に勉強して、父さんを幸せにできる人間になりたいと思います。》

同和教育は価値観を根本から変えていく。私たち自身を解放していく営みだと思います。こだわり怖れおびえ、そういう自分の中にあった真っ黒い差別の塊である部分、そういうものを解き放っていく。同和教育は教育そのものであり、まさしく教育の中核であると考えます。

私たちは毎年、全体学習や公開授業の授業記録を中心に、同和教育の実践記録として「峠を越えて」をまとめきました。毎年毎年繰り返されてきた実践のまとめが、私たち一人一人の大きな力となっていました。4冊目となった昨年度の実践記録、この「峠を越えて」は424頁に及ぶ膨大な記録となりました。

この春休み、編集にほとんどの日々が費やされました。深夜に及ぶ作業の繰り返しで身体はガタガタになりましたが、心にはいつも熱いものがありました。

この実践記録は、共に授業に取り組んだ生徒たちのもとに届けることができました。進学先や実社会での新しい生活のスタートを切ったばかりの生徒たちが、4月末に仕上がった「峠を越えて」を手に取り、一つ一つの授業での発言を思い出し、その授業の場面に思いを馳せる姿に編集の苦労が吹っ飛び、心が洗われる思いでした。「峠を越えて」について生徒たちから多くの思いが寄せられました。その一つ一つが私たちの支えとなっています。

特に、実社会に出て将来、理容師として自立することを目指して、理容店で働いているA子から届けられた手紙は、部落差別の現実と私たちの生き方を問い合わせています。

《先生、先日はわざわざ「峠を越えて」を届けてくれてありがとうございます。一つ一つの授業、みんなの言葉、先生たちの思い、毎晩のように大切に読んでいます。

実は私、ずっと悩んでいたことがあったんです。いつもよくきてくれているお客様に話しかけられたんです。

「おまはん、どこに住んどん？」って聞かれて、「Sです」って答えて、「Sのどこ？」って聞かれたので、「Kです」って言ったら、（Kとは、20戸ばかりの被差別部落です。）それから話をしてくれないんです。

2月に散髪にきたときにそう言われて、3月にまた散髪にきたときよそよそしい態度をとられました。4月にきたときは私がシャンプーをした後で、「何か油をつけときましょうか？」「セットしときましょうか？」って聞いたとき、答えてくれませんでした。

3月、4月と差別されているというか、無視されているんです。こういう職業はお客様と交流＝話をすることが大事なのに、嫌われていて悩んでいたんです。もう泣きたいくらいつらかったんです。何も答えてくれない。ただそれだけのことなのに、たまらなくつらかったんです。

でも私は、今まで板野中学校で学んだことを頭の中においてなく、忘れていたことに気がつきました。今度あのお客様がきたとき、どうしようと思っていたけど、「峠を越えて」を読んで、勇気と元気がわいてきました。

板野中学校での「輝ける日々」。体育館で流した涙。納得いくまで語り合った全体学習。怒りに震えた森口先生の言葉……。忘れていたものがどんどんよみがえってきました。ぐっとくるものがありました。本当の意味での「輝ける日々」が今再びスタートしようとしています。私は私に誇りと自信を持って頑張ります。

この「峠を越えて」を読んで、先生たち（山口先生、吉成先生、中山先生、豊田先生、森口先生、柴田先生、岩佐先生、岡田先生、榎村先生、赤澤先生、山尾先生、板東先生、友成先生、阿部先生、富加見先生）に「お前は何をしよるんな」「お前に今何ができるかを求めて頑張れ」とて言われたような気がします。私に新たな気持ちを持つように、初心に返るように、アドバイスをくれた先生方にお礼を言いたいです。「先生、ありがとうございました。」私はくじけず頑張ります。先生たちも、部落問題学習に全力疾走してください。》

15歳にして、部落差別の現実にさらされ苦しんでいる。この現実に怒りがこみあげてきます。そして何より、A子が手紙の中に、共に全体学習に取り組んだすべての先生方の名前を綴った気持ちが伝わってきます。A子にかかわったすべての教師が、自分のすべてをぶつけて部落問題学習に全力疾走することが、A子の支えになっていくと信じます。

私たちを燃やし、今も生徒たちを励まし続ける授業実践の記録、この「峠を越えて」には、全体学習で取り組んだ「私の目をみて」や「自分以下を求める心」、「意識の芽ばえ」の授業記録、また、進路公開や先ほど紹介しました映画「学校」の授業記録、学級全員が取り組んだ人権劇のシナリオ。そして、この学習に取り組んだ、私たち教師の願いが刻まれています。

この「峠を越えて」は、この全体会場、第2会議室入口に展示しております。多くの皆さんに読んでいただき、私たち教師や生徒の思いに触れていただければ幸いです。また、思いを同じくする中学生や高校生にも是非読んでいただきたいと思っています。

私は昨年度、文部省道徳教育読み物資料作成協力者会議の委員の一人として文部省での会議に参加しました。その会議の中で私は、部落出身である自分の生き立ちや生きざまをさらけ出し、部落問題学習の重要性を訴えていました。

そして、全国すべての中学校で部落差別解消への取り組みがなされていくことを願って、さきほど話をさせていただいた私の父親への思いを『スダチの苗木』という作品にまとめ、今なお血をふいている結婚差別の現実を『峠』という作品にまとめました。

この二つの作品がこの読み物資料に掲載されるまでの道のりは、まさしく峠を越えていく営みであったと思います。

結婚差別の現実をあらわした『峠』という作品は、同和教育を通してつながったかけがえのない仲間の叫びを結集させたものであり、場面の一つ一つが紛れもない事実です。

この作品の冒頭に記した結婚式の招待状。

『 生きるということ

愛するということ

相手のいのちを尊ぶこと

私たち二人は 永遠に

真実を正視し

すべての人間を尊敬し

すべての人間を信頼し

美しさを求めて 生きていくこうと誓いました

私たち 結婚します 』

この招待状は、私が教職についた1年目に出会った、部落出身の女子生徒から送られたものをそのまま引用しました。彼女は小学校の教師となり、結婚の約束をしていた同じ職場の教師と3年前の私のクラス、3年B組の公開授業を6月（板野郡同和教育研究大会）10月（全日本中学校道徳教育研究大会）11月（徳島県中学校同和教育研究大会）と参観にきました。そしてその生徒たちが卒業していった3月に2人は結婚しました。

結婚までの道のり、彼女は部落差別の厳しさを痛切に感じ、その中で投げやりになりそうな自分、負けそうな自分を相手の青年と共に、励まし支え合いながら頑張り続けてきました。この2人の姿は、3年B組の生徒たちに部落解放への主体的な生き方を示していました。

猛烈に反対する母親を必死に説く青年の頑張り。その中で一番最初にこの結婚を認めてくれたのは青年のおばあちゃんでした。一番わからないと思っていたおばあちゃんが、差別することは自分自身を苦しめ、自分の大切な孫を不幸にしていくことに気づき、一番に心を許して、

「いつまでも世間体にこだわってどうする。息子のほんまの幸せを考えてやれ。」

と父親や母親を説いていきました。差別という檻から解放されたとき、人間は本当に幸せになれるんだと思います。2人はまわりの人たちを部落差別から解放し堂々と結婚していきます。その2人がつくった結婚式の招待状、それは2人が中学時代にそれぞれの中学校で学習した「水平社宣言」が土台となっています。

この『峠』や『スダチの苗木』の掲載されたこの読み物資料は、すでに全国の中学校に文部省より配布されています。この『峠』や『スダチの苗木』の学習が、さまざまな地域で確かな方向性を持ってなされていくためにも、いっそうの実践を積みあげていきたいと思います。

私たちは部落解放への営みをより確かなものにし、この全体学習という取り組みが多くの学校に広がっていくことを願って、常に全体学習は他校の先生方にも公開してきました。

多くの先生方が参観した全体学習、その翌日に提出されたN夫の生活記録は、私たちの思いを象徴するものでした。N夫の生活記録を報告のまとめとして紹介させていただきます。

《部落問題学習でつかんだもの、それは3年B組という固い団結の絆だと思う。一人一人の悲しみが怒りとなって語り合い、そして支え合っている。》

全体学習が終わったとき、男の先生がぼくのところにきて、「頑張ったなあ」と言ってくれた。ぼくはものすごくうれしかった。発表して本当によかったと思った。この先生だけでなくほとんどの先生たちがこの学習の大切さをわかってくれたと思う。

この3年B組で、この3年生で、そしてこの板野中学校で燃やしたこの炎を、多くの先生たちがまた誰かにつないでくれたらと思う。

自分の思いを語っていくことによって自分という人間が変わったと思う。2年生に比べて明るくなつたと思うし物事をよく見るようになった。

そして、朝がさわやかに感じられ人の優しさというものが見えてきたと思う。今日帰るときコスモスの花が太陽に照らされていた。まるでぼくに勇気をくれているような気がした。

過去を背負うのではなく未来に希望を持ちながら頑張っていきたいと思う。これからも悲しさではなくうれしさで、そして嘆くよりも怒る気持ちでこれからも峠を越えていきたいと思う。支え支えられてこれからも自分というものを見つめて頑張っていこうと思う。

今日帰るとき女の先生から声をかけられた。「授業、感動しました」と言ってくれた。ぼくは「学校に帰ってからも同和教育頑張ってください」と言った。後でもつといろいろな話をしたらよかったです。でも多くの人の心が動いてくれたことがうれしい。こう言ってくれる人たちには学校に帰っても頑張ってくれると思う。ぼくも任せにならないように頑張っていくつもりです。

果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたっぷり浴び、空気を思いきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても、弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。》

ご静聴ありがとうございました。

※

※

※

この特別報告の中で触れた文部省の道徳資料として著した「スタチの苗木」と「峠」の作品及び指導の手引きも掲載する。様々な学習の場で活用いただければ幸いである。

【作品】

スタチの苗木

東京オリンピック（1964年）の翌年、私は小学校に入学した。高度経済成長期に少年時代を過ごした。当時、毎週土曜日の夜テレビで放送されていた「巨人の星」が楽しみだった。主人公の父星一徹が工事現場で働く場面がよく出てきた。私にはその姿と汗と泥にまみれて働いている私の父の姿とが重なっていた。主人公星飛雄馬は青雲高校の入学試験の面接で、父の仕事を問われたとき、堂々と「父の仕事は日雇い人夫です」と答える。その言葉は私にとって大変な驚きであり、今も忘れるこことない場面として鮮明に脳裏に焼きついている。

当時の学校では、学年当初に提出する書類の中に家庭環境調査というのがあった。その中には必ず保護者の職業欄があり、その欄に何と書こうかと、父と母が相談していたことをはっきり覚えている。ある年は「運転手」と書いてくれた。父には建設会社のマイクロバスの運転をしていたことで、会社から日給以外に手当があったからだ。また、ある年は「農業」と書いてくれた。家族が食べるだけの米を作っていたからだ。父も母もマイクロバスの運転をすることや米を作ることが、家計の足しになっているんだから、こう書くことは嘘を書いているのではないと話してくれた。

当時、親が私に気を遣ってくれていることは幼いなりに痛いほど分かった。そんな状況の中でも父は私たち兄弟に「父ちゃんはみんなが使う道路をつくっている。」と誇らしげに話してくれ

たが、自分は将来はっきりと人に言うことのできる職業につきたいと思うだけで、父の仕事に寄せる思いを分かろうとはしなかった。

父は私を頭に4人の子どもを育てるために休むことなく働き続けた。子育ての終わった今も、父は財布を持たない。給料はすべて母に渡し、自分が自由にお金を使うことはほとんどない。夕食の時にわずかな晩酌をすることぐらいしか楽しみを持たない父、ただひたむきに働き続ける父、今の私は心の底から感謝できるが、以前の私はそんな父の姿が無性に悲しかった。

高校時代、学校が休みの日に父は自分の運転する建設会社のマイクロバスで、工事現場に何度もアルバイトに連れてってくれた。そのことを通して、父は私たち兄弟にも働くことの厳しさやその意味を教えたかったのだろう。私はひたむきに働く父の姿に誇らしいものを感じながらも、現場へ向かう途中に友だちと顔を合わせることをおそれていた。父には申し訳ないと思いながらも、友だちに気づかれまいと顔を隠そうとしていた。

高校3年になる春休み、大阪の病院で入院していたおじを父といっしょに見舞い、その日の午後京都を訪れた。父と見た春の京都はとても美しく、心を清らかにしてくれた。京都御所の小雨に濡れた砂利道。歴史の重みを感じさせる町並み。初めて経験した父と2人だけの旅であった。古都の風情に触れて父は自分の生い立ちを語り始めた。8人兄弟の3番目に生まれ、祖父の身体が弱かったために、中学を卒業してからずっと2人の兄とともに、5人の妹や弟たちの生活を支え働き続けた苦労話である。耳をおおいたくなるようなつらい話を父は自分の役割として当然のように話した。父の心のうちを聞いたのはそのときが初めてであった。

1年後、私は父の思いに初めて触れた京都を大学への進学先に選んだ。

京都での4年間、下宿先のおばさんにはずいぶんお世話になった。おばさんはまるで母のように私たち下宿生の世話をしてくれた。当時の下宿としては大変珍しかったが洗濯までしてくれた。どろどろに汚れた靴下が真っ白になって返ってきた。また、田舎に帰るときは土産まで持たせてくれた。そんなおばさんの姿と重ねて、父や母を思い続けて大学生活を送った。

大学生活が終わって京都の下宿を引き払う時、父は親戚から1トントラックを借りて荷物を取りにきてくれた。父が下宿を訪れたのはこのときが初めてだった。真っ黒に日焼けした作業服姿の父を見たとき、最後の最後ぐらいい背広にネクタイで来てくれたと思った。同じ下宿にいた大学の後輩たちの両親が京都へたびたび来ていたが、その姿は私の父の姿とは全く異なっていた。

父は、ふるさとの花であるスダチの苗木をトラックの荷台に積んでいた。

「どうしてそんなものを積んできたの。」

と不機嫌になって聞いた。父は私を見つめて、

「お前がお世話になったお礼に、おばさんのお宅に植えさせてもらおうと思うて……。」

初めて下宿へきた父の精一杯の感謝の気持ちであった。しかし私には、もっと気のきいた感謝の仕方があるだろうという思いがあった。

苗木を植える父の姿、身体を動かすことを通して感謝の心を表わす父の姿を見たとき、このことはだれにも言葉まいと心に誓う自分があった。少年の頃から抱いてきた父の仕事へのこだわり、その意識は私自身の生きる方向を見失わせていた。

ふるさとに帰って数ヶ月が経過したある日、私はある出来事から大学時代に父が身体をこわし、何か月か入院していたことを知った。当時、正月ぐらいいしかふるさとへ帰ってこなかった私には、父の入院は知らされていなかった。それは私に心配をさせまいとする父母の思いからであった。厳しい病状の中にありながら、入院した父は病室のベッドで仕事の段取りをした。母は父に代わってマイクロバスを運転し現場の切り回しをした。そこまでしなければ子ども4人を上の学校へはやれなかつた父母の精一杯の生き方であった。特に私が無事大学を卒業するまではとがんばり

続け、生命を削ってまで働き続けたこの事実を話してくれたのは父でも母でもなかった。このことが私の心にかつて経験したことのない重いものを残した。「子どものために」ということを決して口にせず、ひたむきに生き働き続けた父と母に私の心は激しく震えた。

私はそんな父や母のことを胸に秘めながら、今でも人生の節目節目に京都の下宿を訪れる。結婚、子どもの誕生とすでに何度か足を運んだが、そのたびにおばさんはしみじみと話してくれる。「ご家族の皆さんお元気ですか。お父さんの持ってきてくださったスダチの苗木は立派に育っています。花はまだ咲きませんけど、あの木を見るたびにあなたのこと思い出します。」下宿をやめられて数年が経過しもう80歳を越えたおばさんである。

スダチの白い花が咲く頃になると、私はきまつて父が植えた苗木のことを思い出す。

※

※

※

【指導の手引き】

スダチの苗木 <第2・3学年 4-(5)>

1 ねらい

父母への感謝と敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚を高める。

2 資料の特質

〔資料の内容〕

厳しい肉体労働に生きる父と母の姿に感謝と敬愛の心を抱きながらも、父の仕事にこだわっていた筆者が、ふるさとに帰って、病気入院中でも、母と力を合わせて働いていた父のことを知って、強い衝撃と感動に打たれる。そして、筆者は父が京都の下宿に植えていったスダチの苗木に思いを寄せ、スダチの花に自らの生き方を確かめるようになる。

〔資料の生かし方〕

「日雇い人夫」の意味を理解させ、肉体労働者への社会的な差別意識にこだわる筆者の心を理解すると共に、父を誇りに思いながらも、外見的なものや他人の眼を意識して、素直に感謝の気持ちを表わせない心の搖れを広い視野からとらえ、父母への感謝と敬愛の念を深めさせたい。

3 事前指導の工夫

生徒が家族の思いや働く姿をどれだけ知り、父母の日頃の言動にどんな思いをもっているかを生活記録などから把握しておく。

4 展開例

例1 父の働く姿に接して揺れる筆者の心の動きを通して、家族の一員としての自覚やあり方を考えさせる。

- 筆者が父の働く姿に誇りを感じながらも、なぜ友だちに気づかれまいとしたのだろうか。
- 父が下宿先へスダチの苗木を持ってきたとき、筆者はどんな気持ちだっただろうか。
- 父が入院中も母と力を合わせて働いていたことを知った筆者の思いについて考えてみよう。
- なぜ人生の節目節目に筆者は、京都の下宿を訪れるのだろうか。
- 自分の持っている父母への思いと重なるところがないだろうか。

例2 父母の働く姿から、父母への感謝と敬愛の心を深めさせる。

- 職業欄に「運転手」または「農業」と書いた両親はどんな気持ちだったのだろうか。
- 給料のすべてを母に渡し、子どものために働き続ける父の姿をどう思うか。
- 自らの生い立ちを語った父の気持ちについて考えてみよう。
- 「子どものために」ということを口にしなかった両親について考えてみよう。
- 筆者はスダチの苗木にどのようなことを感じているのだろうか。

5 指導上の留意点及び工夫

- ・自分が今あるのは、父母からかけがえのない子どもとして深い愛情を持って育てられたからであることを理解し、厳しい労働の中を精一杯に生きる父母の姿に尊敬と感謝の気持ちを深めさせ、家族の一員としての自覚をもたせる。
- ・ふるさとの木を下宿先へのお礼と記念に植えた父の心情を理解させる。
- ・父母が子どものために自分を犠牲にして働いていることを、生徒自身の家族に重ね合わせて理解させる。

6 評価の工夫

- ・自分の家族がどんな思いで働いているか、また父母に対してどのような思いを持っているかを終末の発言から把握する。

7 事後指導の工夫

- ・生徒の発言から家族への思いを知り、個別指導をしていく。
- ・職業についての偏見や差別意識が残っている生徒には、改めてきめ細かい指導をしていく。
- ・学級通信などでこの資料や生徒の発言、感想などを知らせ、家庭で話し合わせるようにする。

8 その他

- ・この資料は、4ー(4)「勤労の尊さ」や4ー(3)「差別や偏見」の資料としても活用できる。

※

※

※

【作品】

峰

『 生きるということ
愛するということ
相手のいのちを尊ぶこと
私たち二人は 永遠に
真実を正視し
すべての人間を尊敬し
すべての人間を信頼し
美しさを求めて 生きていくと誓いました
私たち 結婚します 』

幸司と恵子は、やっとできあがった招待状の原稿を感慨深くながめた。この招待状が生まれるまでには、2人で乗り越えなければならなかつた多くの峰があつたのだ。

2人が教職について3年が経過した春であつた。

「恵子、もう結婚を考えていいい年頃よ。だれかいい人がいるの。」

「お母さん、実は私……。」

大学時代から交際を続けていた幸司のことを思い切って打ち明けた。

その翌日の夕食後、母は険しい表情で恵子に言った。

「あなたがお付き合いしている小野幸司という人、同和地区の人だということ知ってるの。」

「えっ……。」

恵子の心が一瞬曇つた。

「いくらあなたが結婚しようと思っていても、認めるわけにはいかないの。」

「お母さんは、他人を差別するような人ではないと信じていたのに……。」

「人は遠くのことに対する美しく生きられる。でも世間はそんなにあまくはない。あなたの結婚を認めたら、たちまち妹の結婚に大きな障害となってくる。見合いの話なんかは全くなくなるの。」

「それが世の中よ。みんなは自分にかかわりのないところでは、差別をなくそうということは言えても、いざ自分自身の問題になるとそうはいかないの。」

いつもは口数の少ない父も、

「恵子のつらい気持ちは分かる。でもなあ、お母さんが言うように、恵子にも、私たちにも、妹の幸せを奪う権利はない。それだけじゃない。いとこたちまで、これから結婚で肩身の狭い思いをしていくんだ。それが部落差別なんだ。」

恵子は返す言葉がなかった。

恵子には大学時代に友人から聞かされた言葉がよみがえってきた。

「小野君のこと知っているの。彼って、部落（被差別部落）の人よ。」

「付き合うの、やめたほうがいいと思うよ。」

「……。」

そんな恵子の一番の支えになったのは妹の励ましであった。

「お姉ちゃん、絶対に負けないで。私もお姉ちゃんのように世間に惑わされない生き方をしたいと思っている。お姉ちゃんが本当の幸せをつかもうとしているように、私もがんばっていくから……。」

心から応援してくれる妹の言葉がたまらなくうれしかった。しかし、恵子にはただ一つだけ気になることがあった。

数日後、恵子は幸司に思い切って話した。

「幸司は、私を信頼していない。どうして……。」

恵子の目には涙が溢れた。

幸司にはその涙の意味がすぐに分かった。幸司の心の中には、どうして自分から部落出身であることを語らなければならないのかというこだわりがあったからだ。

婚約までしていた相手との結婚が部落差別によって破れ、自らの命を絶った幼なじみの姿が浮かんできた。絶望の中で生きる気力を失っていった悲しみが、自分のこととしてわかるのだ。恵子のすがるようなまなざしが幸司にはつらかった。しばらく沈黙が続いた後、幸司は静かに語り出した。

「部落のことだろう。高校の頃、ふるさとを離れることばかり考えたこともあった。その頃は、ぼくにとって部落は重かった。でも今は違う。人間として、この問題と向き合って生きていきたいと願っている。人生には、乗り越えなければならない峠がいくつもある。2人で共に幸せを求めて生きていこう。」

恵子は幸司の言葉にうなずいた。

「両親は、私たちの結婚に反対しているの。でもあなたとだったら説得できると思う。」

このときから大きな峠を越える2人の歩みは始まった。

「あなたのことば娘から聞いています。あなたはきっといい人でしょう。でも、世間にはまだまだ部落差別があります。親として娘を苦労の淵に追いやることはできないんです。」

初めて幸司が恵子の家にあいさつに行ったとき、母親から返ってきた言葉である。幸司はこみ上げてくる怒りや悲しみを押さえ、言葉をかみしめて言った。

「世間には差別があると言われますけど、その世間をつくっているのは、私たち一人一人ではないでしょか。お母さんは世間という実体のないものを隠れみのにして、私たち部落の人間を差別しているんだと思いませんか。」

「どんなに言われても、親として不幸の中に飛び込んでいく娘を放っておくことはできません。これ以上娘をあなたの思いに引っ張りこんで惑わさないでください。」

母親は感情的になって語気を強めた。幸司は必死に耐えていた。部落に生まれたことがそんなに悪いことなのか。おれがどんな悪いことをしたというんだ。腹の底からつき上げてくる怒りを思い切りぶつけて、早々にその場を立ち去りたかった。

しかし、その後も2人は必ずわかつてもらえると、両親を信じて話し合いを続けた。母がいくら感情的になってしまっても恵子は冷静であった。幸司も両親から訪問をこばまれるときもあったが、恵子との愛を貫くために、繰り返し恵子の家に足を運んだ。

幸司は人間の生命まで奪ってしまう部落差別への怒りを込めて、かつて、部落という『かけ』におびえた自分自身を語り続けた。その思いに触れて当初かたくなであった両親も、段々とその本心を語ってくれるようになった。両親の悩みや苦しみは幸司たちにも理解できた。

人間は世間体というものにこだわり、知らず知らずのうちにお互いを傷つけてしまう、そんな弱さを持って生きている。そういう生き方ではなく、人間としてその間違いを正していく生き方がしたい。両親との話し合いの中で2人がつかんだ思いであった。

やがて両親は幸司が帰った後も、お互いの胸のうちを恵子に話すようになってきた。

「差別される痛みがわかっているから、差別しない生き方をしようとしているんでしきうね。」「人の痛みがわかるからこそ本当に優しくなれるし、悩みながらもがんばっているんだろうね。」「人間、あんな生き方ができたら本当に幸せでしょうね。」

恵子には部落差別が両親を苦しめていることが手に取るように分かった。だからこそ、2人の思いを理解してもらいたかった。

やがて、両親は家族だんらんの場でそれぞれの思いを語り合うようになった。

「結婚に反対することを恵子の幸せのためと言ってきたけど、結局は私たちが差別されないかと恐れて、恵子を苦しめてきたのではないかしら。」

「そのことで私たちも苦しんでいたと思う。恵子の思いを大切にしてやることが、親として当然のことだと思うようになったよ。」

「私たちが自分の『かけ』におびえていたんだわ。」

「私たちが自分の『かけ』をなくすことが、恵子を幸せにしていくことにつながるんだね。」

恵子は信じることの喜びや幸せ、人は変われるということをしみじみと実感した。

1年が経過し桜が満開になった春の日、恵子が両親に言った。

「みんなに祝福されて結婚したい。お父さんやお母さんにも、幸司さんのご両親にも、心の底から喜んでもらえる結婚にしたいの。」

「そうね。自分の子どもの幸せを考えるなら、他人の子どもの幸せを考えなくてはね。幸司さんの幸せは恵子の幸せなのね。」

「人を差別することは、自分自身も苦しめていく。差別は損の分け取りなんだね。」

母親のあとに父親がつぶやくように言った。恵子はたまらなくうれしかった。大きな峠を越えたと思った。

翌日訪れた幸司に母親は語った。

「部落の人たちはかわいそうな人たちだと思っていました。でもあなたは人間としての誇りを持

って生きています。そんなあなたを娘も尊敬しています。」

父親も身をのり出しながら力を込めて語った。

「私も、部落の人たちは、重い荷物を背負っている人たちだと思っていました。しかし、その荷物の中に私たちが入っていたことにやっと気づきました。君たち2人の本当に愛し合う姿を見て、私たちも共にその荷物をかついで生きていこうと話し合ったんです。」

2人でともし続けてきた小さな灯が大きな炎となって燃え広がっていく。

※

※

※

【指導の手引き】

峙 <第3学年 4-(3)>

1 ねらい

社会連帯の精神をもって差別や偏見をなくし、よりよい社会を実現する意欲を育てる。

2 資料の特質

〔資料の内容〕

部落差別の中で、最も深刻な結婚に関わる問題に取り組んだ資料であり、差別の本質を訴えている。

被差別部落出身の幸司との結婚に反対する恵子の両親の態度に苦悩しながらも、2人は深い愛情に結ばれ、誠実に自らの思いや願いを語っていき、両親を変容させていく。

〔資料の生かし方〕

恵子が母に幸司との結婚について話した。その翌日に両親は幸司が部落出身であることを調べ、世間にこだわり娘を苦しめていく姿を通して、差別はするものもされるものも、その両方が苦しんでいくことを理解させる。

特に幸司と恵子のひたむきな生き方に共感し、差別はなくしていくことができるという信念を持たせたい。また、招待状に込められた2人の生き方が、両親をえていったことに気づかせると共に、差別や偏見をなくし、よりよい社会を実現する意欲を育てる。

3 事前指導の工夫

政治的な制度としては、江戸幕府によってつくられた被差別部落の存在が、明治4年の解放令でに廃止されたにもかかわらず、それ以降も厳しい状況におかれ、差別が残されたことを社会科の学習などを振り返って確認しておく。

4 展開例

例1 幸司や恵子、両親の生き方を通して、社会連帯の精神をもって差別や偏見をなくしていくとする意欲を育てる。

- 「妹の幸せを奪う権利はない」といった両親の思いは、どういうものだったのだろうか。
- 幸司や恵子の両親が語った『かけ』におびえるとはどういうことだろうか。
- あれだけ世間体にこだわって、結婚に反対していた両親を変えたものは何だろうか。
- 「共に荷物をかついで生きていく」とは、どのような生き方だろうか。
- 部落差別を始めとする様々な差別をなくすということは、自分にとってどんな意味があるのだろうか。

例2 幸司や恵子の苦悩に寄り添い、その立場に立って考え、積極的に差別解消に取り組む意欲を育てる。

- 「私を信頼していない」と言い出すまでの恵子の気持ちは、どのようなものだったのだろうか。
- 恵子に対して静かに語り出した幸司には、部落についてどんな思いがあつたのだろうか。

- ◎ 2人が「この問題と向き合って生きていく」とは、どのように生きていくことだろうか。
- 結婚式の招待状に記された「美しさを求めて生きる」とは、どのように生きていくことだろうか。

5 指導上の留意点及び工夫

- ・私たちにとって同和問題の解決は国民的課題であり、国の責務であることを理解し、様々な差別を自分自身の生き方の問題としてとらえさせる。
- ・両親を信頼して、2人の生き方を真剣に語り続けたことが、両親を変容させ、両親の確かな生き方につながったことを理解させる。

6 事後指導の工夫

「私と差別問題」という視点で授業後の感想をまとめ、部落差別だけでなく他の様々な差別や偏見をなくすことが、自分自身の幸せにつながることを理解させるとともに、日常生活の中でよりよい社会を実現する態度を養う。

7 その他

本資料は、現実にあった差別を乗り越えた部落出身教師の体験をもとにした資料である。部落問題は、まだまだ厳しいものとして残っている。今後いっそう差別や偏見の解消に取り組む意欲を高め態度を養いたい。

※

※

※

この二つの資料は、文部省が全国の中学校に配布した中学校読み物資料とその利用「主として集団や社会とのかかわりに関するこ」の中に掲載された。この資料に寄せて思われ人から手紙や電話をいただいた。その中には大学の先輩や友人からの手紙があった。ちょうど1年前、社会科の教員の研修会で一緒になった京都で中学校の教員をしている先輩からの手紙は、本当にうれしいものだった。

※

※

※

拝啓 師走も半ばを過ぎようやく真冬の寒冷が身にしみると共に、学期末も迎えて大変慌ただしい季節となってまいりました今日この頃、先生にはますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、今日は居ても立ってもいられない気持ちでお便りをさしあげた次第です。

今日、朝から回覧文書の閲覧中、文部省発行の道徳教育推進指導資料（指導の手引き4）を手にとって何気なく開けたページから目に飛び込んだのは「スタチ」のイラストと「森口健司」という先生のお名前でした。夢中になって読んだ先生の「スタチの苗木」の文章は、まさしく昨年の夏、低気圧の接近で苦心惨憺して到着した社会科教員の研修会（北方領土教育指導者研修会）の会場である根室グランドホテルでお会いし、その際の懇親会場で先生から真摯に語っていただいた先生の生い立ちや同和教育にかける熱意そのものであり、何という因縁かと感激した次第であります。

今日、先生の一文を読ませていただき、昨年の夏の鮮烈な記憶を呼び覚ましながらお便りをさせていただきました。先生の言葉に教えられつつ、人間としての正しい生き方を今後とも模索し、同志社の良心の碑である『良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起り来タラン事ヲ』念じつつ日々の仕事や生活に精進していきたいと存じます。

先生も同志社大学の柔道部で鍛えられた頑健な身体と真心でますます活躍のことと存じますが、ご家族共々御自愛され御精進されますよう御祈念申し上げます。

※

※

※

人と人とのつながり、本当にありがたいものである。多くの人の生命に生かされていることを実感する。最後にこの報告のまとめとして、特別報告のビデオのダビングを依頼された大阪府の

小学校から送られた手紙と全同教参加の感想を掲載させていただく。研修や交流の場の広がりが私たちに問われていると思う。

※

※

※

早速、全同教特別報告のビデオのダビングのお願いをお受けいただき、ありがとうございました。先日も電話でお話ししましたように、板野中学校の森口先生の報告を聞いた夜の交流会では、職員一人一人が、自分と部落問題、あるいは自分の親のことを語り合いました。

午後からP T Aとして参加した保護者も、職員の話を聞きながら、自分の家庭の問題を語っていました。職員、保護者が共に生活を語り合う交流会になったのは初めてでした。

その交流会の場でも、また職場に帰って「峠を越えて」の本を紹介した後も、ぜひ森口先生の報告テープを聞きたいという声が出ました。そこでこんな無理なお願いをしました。

本校では、「共に生き、生活を高める子をめざして」というテーマで11月に公開授業をしています。それぞれの子がそれぞれの立場で生活を綴り、生活を語り、反差別の関係を創ろうとしています。ムラの子は、解放子ども会で、学校の部落問題学習を仲間とどう創っていくかを相談し、学校では、祖父母のムラを支えた「再生資源回収」の仕事を語ります。（もちろん、揺れながら……）立場宣言する子もいます。その子につながり、自分のこと（家庭、身体、障害を持つ兄妹のこと……）を語る子もいます。

まだまだ不十分ですが、板野中学校に学び、また一つ一つ足元の取り組みを大事にしていきたいと思います。

また、本校では毎年全同教に参加した職員がレポートで報告しています。森口先生の報告にふれたレポートもありますので、同封させていただきます。

<私にとっての全同教大会>

全同教大会への参加は、大阪で行われた2回と今回の徳島で3回目の参加です。2万人余りの人々の動きは、心を震わせるようなものがあります。全国から結集してくる人々の大会に寄せる思いに心打たれるものがありました。特別報告の森口先生の報告は、先生の熱い思いに圧倒されるようでした。中学という時期の生徒に日々の取り組み、全体学習の中で取り組まれた真実の姿は、教師集団を変え、生徒の語りは支え合い信頼し合う仲間をつくる生きる力になるものでした。

<全同教大会徳島大会に参加して>

11月26日、全体会の会場、アスティとくしまへ車で向かう。車があふれている道、案内図を手にしている人、こんな渋滞をつくるくらい、多数の人の参加があるんだろう。

予想通り、会場は満席、通路に座り込む他はなかった。あいさつや基調提案の間は、何となくザワザワしていた会場が、特別報告「峠を越えて」が始まると、徐々に静かになっていき、会場全体が壇上に集中していくのが感じられた。

午後どこの分科会に行こうかと考えながら資料をめくっていた私も、いつしか画面に吸い寄せられていた。肩ひじ張って力んでいる様子もなく、淡々とした森口さんの語り口、それだけに心の中に直球のボールを投げ込まれるように言葉が届けられてきた。

《心に残ったことは……》

・全体学習、クラスの取り組みから、学年全体への取り組みに広げていったこと。その中で、学年の教師集団のつながり、仲間意識がベースになって、学年全体の生徒一人一人を部落解放に向けて生きるかけがえのない仲間としてつなげていったこと。

・自分の生き方を語る、教師自らの姿勢

耳が聞こえない弟を人に知られるのが嫌だった。実の弟をそんな目で見る自分が恥ずかしい、情けない。私はそんな自分を変えていくために、自分自身のために部落問題学習をしていくと語る教師。

・森口さんの生き方

故郷を離れることを第一に考えていた高校時代。出身であることを隠し、差別を目の当たりにしていても自分を殺して生きてきた大学時代。

「すばらしい人の中にも部落差別が入り込んでいることを思い知らされた」

森口さんを出身と知らず森口さんの目の前で差別発言をする人、その人を足ざまに罵りもせず、すばらしい人、大好きな人と話す森口さん。

もうこの辺で私の目から流れる涙は止まらなくなっていた。

・キンカンとスダチの苗木を植えているお父さんの思い。

「初めて下宿へ来るんだからネクタイの一つでも締めてくれたら」としか見れない自分。本当はうれしいのに、「こんなお礼の仕方しか思い浮かばんのか、もっと気のきいた……」と考えたこと、妻に父の仕事を聞かれ、「一生懸命働きよる」と答えたこと。それが今素直に「父ちゃんありがとう」と言えることが喜び。このことをまとめた冊子を父に見せたら、「お前のような先生がおったら、部落の子はうれしかろうな」と返す父。ぶきっちょながら熱い心でつながっている父と息子。私も家に帰ったら実家の父に電話してちょっと優しい言葉の一つも言ってやろうかなと思った。

・子どもたちの話、もう私は涙でメロメロ、まわりからもすすりあげる音しきり。

「学校」の映画を見た後、「ぼくの父さんもあんな感じだったのかなあ。宿題を教えてもらったとき、父さん苦しかったんだろうな」と話した生徒。

理容店で働いているA子からの手紙、「『峠を越えて』を読んで、勇気と元気がわいてきました。板野中学校での輝ける日々、私は私に誇りと自信を持って頑張ります。」

自分の思いを語っていくことによって自分が変わった。前に比べて明るくなつたと思うし、物事をよく見るようになった。そして、朝がさわやかに感じられ、人の心の優しさというものが見えてきたと思う。今日帰るとき、コスモスの花が太陽に照らされていた。まるでぼくに勇気をくれているような気がした」と語るN夫君。

中学3年という年齢の男の子が、これだけ素直に自分を見つめている。「授業の確かさ」ってのことなんだなと思った。

<全同教徳島大会に参加して>

いつもの全同教大会と同じように、たくさんの人々がホールに入りきれずあふれていた。これだけ多くの人々が差別に立ち向かっていたらと思う気持ちと、自分はどうなんだろうと思いながら特別報告を聞く。

特別報告は「峠を越えて」と題して始まった。

淡々と語る森口さんの口調にしばらく聞き入っていくうちに全体学習の話になった。本音を語り始めた他の子どもたちに混じって、K子さんが自分の出身を声にならない言葉で語ったこと、そして、森口さん自身が必死に言葉をつなげ、そのことをきっかけに自分の思いをクラスの生徒に語っていったと話してくれた。

その話の中から、自分自身のことや、今のクラスのことが頭の中に浮かんでは消えた。クラスのことで言うと、Aさんを取り巻く子どもたち、言葉や同情で「……してはいけない」「かわいそうだから……」と言っておきながら、いざ話し合いの学習になり、自分のこととなると、「○

○さんはきたない」「つばがおちる」「よくこぼす」などと言い、自分が避けたり一緒に遊んだりしなかったのはAさんのせいのように言う。そう思っていたり、そう見ている自分は悪くないけど、「Aさんが……だから」と考える子どもたちを自分はどうどのように変えることができただろうか。これから子どもたちとどうやって変えていけばよいのか、本当に考えさせられてしまった。

さらに、この学習の場では、子どもたちだけが本音を語るのではなく、教師自身も本音を語ることで、自己の差別意識を洗いなおしていく取り組みだと聞いた。

そして、この中で森口さん自身が自分もこの学習の場で「今まで乗り越えることのなかった峠を越えてきた」と自分の父の話をしてくださった。父親の仕事を恥ずかしいと思っていたこと、職業を書くとき、「農業や運転手」と書いてもらい、後ろめたさはあったものの、父親のようにはなりたくないと思っていたこと。さらに、大学を選ぶとき故郷から遠い京都を選び、差別から逃げようとしていたことを話してくれた。しかし、信頼する人、尊敬する人から出る差別の言葉はつらいと語ってくれた。

また、自分をかわいがってくれた下宿のおばさんから、「あの入たちは生まれが違いますからね……」と言われ、こんなすばらしい人たちの中にも、部落差別が入り込んでいることを痛烈に思い知らされたこと。

そんな思いが教師になりたいと決意させたこと。

そして今、全体学習の場で、本音で話し合う中で、父親に対する思いが変わってきたこと。そして、父親が京都の下宿先でお礼に植えた「スダチの苗木とキンカンの苗木」をまとめることで、心から「ありがとう」と言えるようになり、それを読んだ父が「お前のような先生がおったら、お前のクラスの部落の子はうれしかろうな……」と言われたことを話された。

この話で思わず涙が頬を伝わってしまった。果たして自分はクラスの子どもたちに「先生がいて……」と支えになれただろうか。クラスの子どもたちを互いに支える関係をつくれただろうかと考えると、さまざまな思いが胸にこみ上げてきた。

今のクラスに必要な横のつながりはどうつくっていけばよいのか。頭の中が混乱してしまったり、自分の反省ばかりが浮かんでは消えた。

さらに、自分の父親を森口さんのように見ているのか。私は田舎にいるときは、父のことを嫌だと思っていた。結婚後、母親と話をしているときに初めて、父が母と結婚してから定時制高校に通い並々ならぬ苦労をして卒業したことなどを聞かされたとき、初めて結婚前にうるさく学歴のことを言う父の言葉が納得できだし、私や兄弟たちに「大学に行って職を持って働くかなだめや」というさく言っていたことを思い出した。またその一つが結婚反対の理由であったことも分かった。

母から父の生き方を知らされたときから、少しずつ恨んだり嫌ったりしていたことを反省させられると同時に「すごくがんばった人やなあ」と見れるようにもなった。これは私が部落問題とかかわり、日頃の学習で子どもたちの話し合いの中で、自分を振り返る機会を与えられること。また、全同教などの自分を振り返ることができる場があるからだと思っています。

<全同教大会徳島大会に参加して>

徳島県同教、森口健司さんの特別報告「峠を越えて」を聞き、自分自身を次のように見つめました。

「差別意識を植えつけられてきた教師が、同和教育への研究も研修も不十分なままで教壇に立ち、自分の学級だけで表面的な価値観を押しつけてきた授業であり、自らの差別意識をごまかした教

師が『差別はいけません』と言い聞かせやお説教をしてきたのである。……密室の同和教育をしてきた……」

建て前の発言でなく、本音で部落問題を語っていこうと学年全体での授業を始めるきっかけを語っておられました。ムラの子に胸を張って誇りを持って生きていってほしいからでしょう。

自己を見つめることのない授業をしても気づかない。いや気づこうとしない自分だけど、一生懸命答えようとしている真剣な子どもから私は学んできました。

その子の抱えている生活を見つけたとき、その子が少し分かりかけてきました。授業は「教材を教えるのではない。教材で学ぶものである。自己を見つめるものであることを……。」それ以後20数年間、課題解決の授業をしてきたつもりです。

しかし、森口さんの実践は、「差別があることに気づかないのは、自分自身の中にある差別意識に気づいていないからです」と言い、「今まで担任してくれた先生は、口先だけで差別はいけないと言う。でも今は本当に心から言っていることが分かりました。だから学年全体での部落問題学習が真剣に取り組めるようになってきたと思います。」とも発言する。

森口さんは、教師対生徒でぶつかり合っていくのではなく、人間対人間のぶつかり合いをしていられると思いました。小学校6年生の子だって、人の心に訴え、自己やまわりをすばらしい感性で見抜き見つめます。

中学生ならもつともっと差別のしくみや世の中を見る目も広がります。本音と本音で自己を語るとき、差別する者、される者がはつきりと分かるのでしょう。それを引き出し育むのが教師の役目なのでしょう。

「教師が一番しんどいところに立たないで、どうして部落差別の中で揺れている生徒たちが頑張っていけるだろうか。」「教師が心の底にある本当の思いを語っていかないで、どうして生徒が本当の思いを語れるだろうか。」公民館で発言された方々の思いや、自分がそこでしゃべったことが頭をよぎりました。

また、森口さんは、自分の父親の心を部落差別のために理解できなかった昔の生活を語られました。私自身、人に「尊敬する人物は誰か」と尋ねられたら、迷うことなく「父親」と答えてきただけに、最愛の父親を理解できないようにさしたるものへの憤りを強く感じました。森口さんは自らの実践記録を親に贈り、読まれた父親から「お前のような先生がおったら、お前のクラスの部落の子はうれしかろうな……」と言われ、たまらなくうれしかったと語っておられました。私の最愛の父はお墓の中で眠っていますが、田舎へ帰ったとき、そう私にも語りかけてくれるように勉強せないかんなあと思いました。

全体学習が終わったときの生徒の記録に「全体学習が終わったとき、男の先生が僕のところへ来て「頑張ったなあ」とか「よかった」とか言うようなことを言ってくれた。……。この先生だけでなく、ほとんどの先生たちが、この学習の大切さを分かってくれたと思う。……。この炎を多くの先生たちが、また誰かにつないでくれたらと思う。自分の思いを語っていくことによって、自分という人間が変わったと思う。……。過去を背負うのではなく、未来に希望を持ちながら頑張っていきたい。これからも悲しさではなくうれしさで、そして嘆くより怒る気持ちで、これからも峠を越えていきたいと思う。」

このN夫君の生活記録は、6年1組の子と重なり、本音で生活を語る子のみに共通するものを得た思いで、N夫君のすばらしさと共に、改めて子どもたちのすばらしさを感じました。本校の公開授業研究会やその翌日に発言していった子たちは、発言することによって自分を見つめ、決意を述べているのだと思います。新たな旅立ちへのメッセージです。

<同和教育（解放教育）はええもんや、温いもんや>

公開授業研究会を通して見えてきた課題に対し、チャイムの後に生き生きと取り組んでおられる本校の先生を見ていると、「同和」教育ではなく、『解放教育』と呼ぶにふさわしいなと感じています。自分、クラスの子、聞き取ったことを語られるとき、本当に生き生きとしておられます。

徳島でも、その『解放教育』の「熱と光」の中に入ってきました。

特に生活を語ることの意味と重大さが改めて分かりました。

「部落問題学習でつかんだものは固い団結の絆だ。一人一人の悲しみが怒りとなって語り合い、そして支え合っている。

自分の思いを語っていくことによって、自分という人間が変わったと思う。2年生に比べて明るくなつたと思うし、物事をよく見るようになつた。そして、朝がさわやかに感じられ、人の優しさというものが見えてきたと思う。

今日帰るときコスモスの花が太陽に照らされていた。まるで僕に勇気をくれているような気がした。過去を背負うのではなく、未来に希望を持ちながら頑張っていきたいと思う。これからも悲しさではなくうれしさで、そして嘆くより怒る気持ちで、これからも峰を越えていきたいと思う。支え支えられてこれからも自分というのを見つめて頑張っていこうと思う。

『授業、感動しました』という先生に『学校に帰つてからも同和教育頑張ってください』と言つた。この人たちには学校に帰つても頑張ってくれると思う。僕も入任せにならないように頑張つていくつもりです。

果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたっぷり浴び、空気を思いっきり吸つて、仲間と共に歩み、足踏みすることがあつても、弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。」

特別報告の中の中学生の言葉です。

北代色さんの「夕やけがうつくしい」を思い起こさせる淒い文章です。生活を語った子が生き生きとしてくるのが分かる気がします。

これを読んで、公開授業研究会の総括での語りを思い出しました。

「語ることで今ある事実が変わるわけではない。誰かに助けてもらうために語るのでない。ただ自分が語りたいから語るのだ。今の自分に気づき、そこから脱皮しようとして語るのだ。自分がそうだった。」

私はどうしてきただろうか。卒業生に、ほんの少し語つていただけではないか。板野中学校では、教員がまず自分と部落問題を語ることから、部落問題学習が出発すると言います。

<全同教大会徳島大会に参加して>

森口さんの報告は、反差別共同を築く実践そのものだった。

「この授業が、私の目覚めであったし、自分を解放していくスタートであった。」と言われるように、全体授業で自分を語られた森口さん。故郷から逃げる様に京都の大学を選んだこと。そこで差別の現実にあいながらも、ひたすらに「出身」を隠したこと。下宿を引き払うとき、下宿のおばさんへのお礼に「キンカンとスダチの苗木」を持ってきて庭に植えた父を恥ずかしく思ったこと。そのことを今心の底から、「父ちゃん、ありがとう」と言える自分になれたのは、全体学習を通して自分の本心をぶつけて部落問題学習に取り組んだからだということ。そしてその思いをまとめた冊子を見た父が、「お前のような先生がおったら、お前のクラスの部落の子はうれしいやろな」とつぶやいたこと。

また「自分の思いを語っていくことで自分という人間が変わったと思う。人の優しさが見えて

きた。過去を背負うのではなく、未来に希望を持ちながら頑張っていきたい。参観された先生に『感動しました』と声をかけられた。僕は『学校に帰ってからも、「同和」教育頑張ってください』と言った。』という生徒の授業の感想。

また「峠を越えて」の本を受け取った理容店で働く子からは、「お客様から住んでいるところを聞かれ、Kと言ったとき口も聞いてもらえず差別に苦しんでいたが、『峠を越えて』を読んで勇気と元気がわいてきた。全体学習がよみがえり、私は自分に誇りと自信を持って頑張ります。」という手紙をもらったことなど……。

森口さんの語りに画面釘付けになって、自分も解放されるような感動で涙が止まらなかった。どうしてテープを持ってこなかつたのかと残念だった。

夜の交流会では、森口さんの報告をしながら、PもTも自分と親を語っていく内容になった。卒業生のS君が、「自分が生活を語ったら、生活を語って応える仲間がいた。」と中学校での『立場宣言』のことを語ったことがあった。報告と交流会に卒業生や今年の6年生の授業や公開授業研究会の総括を重ね思い浮かべながら、生活を語ることはつらいことではなく、「自分を解放し、人とつながることだ。」との思いをさらに強くした。

<全同教大会徳島大会に学ぶ>

2万5千人を超える参加者で会場（アスティとくしま）の中は、まさに熱気がムンムン、その中で昨年度もそうであったが特別報告の内容に圧倒された。現在、中学校の教師をしている自分の生きざま（小学校時代、自分の父親の仕事に対して偏見、自分の立場を知りそのことから逃避したいと考えた中・高校生時代、故郷を離れて京都での大学生活の中での人や差別意識との出会いなど）を語り、「同和教育は価値観を根本から変えていく。私たち自身を解放していく営みだと思う。こだわり恐れ怯え、そういう自分の中にあった真っ黒い差別の塊の部分、そういうものを解き放っていく。同和教育は教育そのものであり、まさしく教育の中核であると思う。」と力説した。そして、自らの解放を求めて、本当の思いを語り合うこと（子どもだけでなく教師も己の生き方・暮らしを語る中での全体学習）の取り組みの報告が続いた。森口さん、板野中学校の構えは私たちのめざす教育の方向、内容の大しさを再認識させてくれると同時に、そのことの厳しさを自分に突きつけてくれた。



全同教開会行事参会者（於 アスティとくしま）



特別報告 森口教諭（於 アスティとくしま）

大会の数日前、私は祖父のことについて次のような思いを綴っている。

1994年11月19日19時

あれは小学校3年生ぐらいだったと思う。野球のグラブを買ってもらうために、当時祖父がやっていたプロイラーの飼育、その出荷についていった帰り徳島の街を歩いた。そして、祖父と丸新デパートの今でいうファミリーレストラン（大食堂）で食事をしたことを覚えている。ごちそうの並んだウインドー、私は当時「オムライス」が最高のごちそうだった。他にも値段の高いメニューに目はいったが、それでいいと言った。祖父はもう一つ何か食べようかと言ってくれた。私は迷った。私は安いものをさがした。それが「みつ豆」だった。祖父も私とまったく同じものを食べた。「オムライス」と「みつ豆」、本当にささやかな贅沢だった。

グラブを買ってくれた遠慮からだったのか。祖父に対する遠慮からだったのか。そのことは覚えていないが、高いものを食べたら悪いという気持ちがあった。

私は今日、そのことを夕食の場で思い出し、不覚にも妻と子どもの前で涙をこぼした。その涙の底にあるものは何だろうか。祖父への哀れみか。あれほどひたむきに生きても幸せ薄い社会への怒りか。祖父の命をしっかりとかついで生きていきたい。

私は小学校4年より小学校6年の終わりまで、まる3年間祖父に鍛えられていく。朝6時に起床、身の周りに片づけ、当時6時17分から放送されていたNHKの「テレビ体操」に合わせて祖父と共に体操をする。6時30分より玄関から庭の掃き掃除、6時45分より30分間、祖父と共に仏壇の前に座りお経をあげる。そして、朝食……。

そんな毎朝のことが、今の私のものの見方や人間の生き方についてのとらえ方の基盤になっている。当時はたぶん苦痛であつただろうが、それはしなければならないことという認識があつたと思う。大学時代、友人と酒を飲んだら、そんな少年時代のことがなつかしく思い出され、よくそのときのことを友人に語ったものだった。私の中にあった祖父への感謝の気持ちが、その当時のことをなつかしく語らせていったのだろうと思う。

小学校4年になる4月、私は祖父にこんこんと言わされたことをはつきりと覚えている。それは決して人から後ろ指を指される人間であつてはならないということだった。身の周りのことでも金銭のことでも、キチッとした人間でならないということだった。そのとき、祖父から金銭出納帳を渡され、その日から小遣いの使い道をしっかりと書かれていく。

とにかく、小学校4年から何事についても厳しく、いろいろなことを教えられてきた。それは祖父に私にしてくれた精一杯の同和教育であったと思う。

そんな祖父が全同教大会の1ヶ月ほど前から幾度となく「全同教大会、頑張れよ」と言ってくれた。その言葉が本当にありがたい。祖父の無念を、先人の無念を、私はしっかりとかついで生きる。この怒りをわがエネルギーとして堂々と特別報告の舞台に立とう。絶対卑屈にならない。堂々と生きる。自分の生きざまを堂々とさらして生きる。誇りうる生き方を求めて……。